
封魔伝説

棋星

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封魔伝説

【Nコード】

N1825A

【作者名】

棋星

【あらすじ】

世界は3つの大陸から出来ており、北に内戦の大陸トランミラノ、東に商業の大陸レギナ、西に軍事と文化の大陸ラミーヤがそれぞれ分立している。その3つの大陸を結ぶ中央には未開の土地ドールクエスタが広がっている。本編の舞台は西大陸ラミーヤの最南部に位置するセルメン王国。大げさな軍は持たないが数百年間あり続ける大陸随一の文化の国である。しかしここ数年北に隣接する大国アグリードとの関係が悪化して、まもなく交戦状態に入ってしまうこと必至であった。そして、セルメンの国王は王子ルードに出撃を命じ

るのであつた。

序章 常闇（前書き）

序章は本編とは少しはずれていますが、後々つながってきますのでご了承ください。

序章 常闇

「船を水平に保て！」

激しく雨が体に打ち付ける。まわりにある物は水のみ。黒い、真つ黒い水が、龍のようにうねる。

「早くしろ、波に飲み込まれるぞ！」

船長の怒鳴り声が入ってくる。気分が悪い。船に揺られているせいもある。だが何か違う。ここはだめだ、ここに来てはいけなかった。何かがそう告げている。

「せ、船長、もう耐えられませんか！」

「く、くそう、せ、せめてアラン王子だけはお守りしろっ、いいな！」

「し、しかし！」

「波だ！大津波がきたぞっ」

船員たちは絶望の表情でみんなもう動こうともしない。いや、出来ないのだ。恐怖で、自分の死が確実に迫っているという恐怖で…

恐怖？その程度でか？俺はそんなものじゃない。何かに絶対的支配を受けているとは思えない。違う、支配ではない、これは…

「な、中へ入れ！もうそれしかない！」

「しかし、この船は沈みます！」

「そんなことは分かっている！アラン王子、早く中へお入りください、さあ、我々も…」

「もう遅いです、手遅れです！」

「間に合う、急げ！」

「っ、津波が到着しました！」

「…く、これまでか…アラン王子、最後まで守れなかったこと心残りです…」

「最後までアラン王子と共にあれて、光栄でした…」

終わらない…と、思った。俺だけは。これが最後ではない…と。死

が理解できない。死ぬのが怖いとも思わない。心残りもない。だが…死ぬない。死んでもいいが…死ぬことができない。俺の近くには死以外の何か、何かが満ちあふれている。やはり…ここには来てはいけなかった…

！

暗い…ここは…

やはり死んでいないのか…死後の世界なのか？

水が体に絡みつく。

さっきの海か…溺れているんだな…まだ死んでいない、やはり…

暗い…熱い…

目の前が黒く歪んでいる。熱さはそのせいだろう。

手を伸ばす。この歪みは…

指が歪みに届いた…瞬間！

その歪みはもの凄い勢いで体の中に入ってきて…

そして…世界は闇に包まれた。

第1章 暗黒の幕開け

暗くよんだ空気が流れる。

「陛下、出撃準備完了致しました。」

明かりも少なく周囲は閉め切られている。中央に長く伸びる赤い絨毯の先には、豪華にほどこされた玉座があり、そこには黄金の鎧を着込んだアグリード王の姿があった。

「よし、直ちにセルメン王国へ攻め入れ。奴の、カウレッドの首を取ったら速やかに戻るのだ。」

密閉された空間に、どす黒い声が響き渡る。陛下の前に跪く珍しい緑髪で黒い鎧を着込んだ兵士が顔を上げる。

「しかし陛下、今セルメン王国に攻め入ることが得策とは思えませんが。北のフィン王国が軍事の増強を図っている今、他国に軍を向けることはフィン王国に対して隙を作ることになります。」

王は話が終わる前に遮り、

「黙れキラ。貴様は僕の言うことに従っておればいいのだ。余計な口出しをするな……ふん、一つだけ教えておいてやるのか……これはストイにも言っておらぬことだ。」

「はっ、陛下」

アグリード王の顔は不適に歪み、

「フィンはまもなく僕のものとなる」

「なっ」

兵士は、驚きのあまり声を出してしまふ。

「他言は無用だ」

「しかしそれはっ……陛下の……思うままに。」

「よし、さがっていい」

「はっ……」

キラは密室から出ていく。

「ふん、若造め……ストイに似てきたな……ジェルム！」

「はっ」

王の前に人影がすつと落ちる。

「ストイとキラをやれ」

「はっ」

そして影は再び闇へ消えていった。

同じ頃、場所は変わりセルメン王国王都フェレデ。

その中央を流れる川の分流地点にセルメン城はある。

特殊な形状をしており、古く、歴戦の古城を思わせる。実際その通りで、セルメン王国領土に以前あった王国エクセス時代初頭に作られたもので、今より700年も遡る。エクセス王国時代以前西大陸は、小国の興亡の連鎖で、紛争の時代であったが、その頃名もなかった小国デイルネキアによって統一された。しかしその翌年にエクセスが独立し、統一国家は1年で終わった。その頃のエクセスは現在のアグリード領までが支配域であったため、現セルメンとは交流が活発であった。しかし、突然アグリードは兵を率いてセルメン領をも侵し、独立した。その後国交を取り戻したが、近年再び関係が悪化している。

話を戻し、セルメン城。緑豊かで中庭はまるで森のようである。その中央の整備された道を一人の青年が抜けていく。腰には鋭い銀色の長剣が差し込まれている。

セルメン王子ルード。

艶やかな黒色の髪と同色の鋭い目、整った顔。彼からは力と勇気が感じられる。

彼の行く先の門の前に、2兵に守られた鎧姿の女性がいた。腰まで

黒髪を伸ばし、その腰の鞘には、緑色をした細身の変った剣が差し込まれている。

セルメン王女ミレット。

少しゆるんだ黒い目、こちらを整った顔。彼女からは優しさと内に秘めた闘志が感じられる。

「待ったかな？」

ルードがミレットの横まで来ると立ち止まる。

「ちよつとね。」

ミレットが城の中へ歩き出す。ルードもついていき、

「怒ってる？」

「ちよつとね。ルードのことだからまた訓練で時間忘れてたんでしょ…いいわよ、いつものことだからもう慣れました。」

ミレットが少し早歩きになる。

「さすが姉様。当たりです。」

「姉様はやめなさいって、いつも言ってるでしょ。」

「はい、ミレット王女様。」

「…姉さんでいい！ほんと、この会話何回目か…そろそろ腕の1本や2本斬り落としても…」

突然ルードの顔は恐怖に歪み、

「つて、怖いよ、姉さん…」

「ちゃんと言えるようになったね…良かったね、体と腕が離ればなれにならなくて…」

「…（姉様ってこんな人だったっけ…？）」

二人はその後無言のまま玉座の間に到着する。そこには、威風堂々たる二人の父であり王でもある、カウレッド・セルメンの姿があった。ルードが跪く。

「父上、遅れてすみません。」

王が立ち上がる。

「ルード、久しぶりだな。しばらく見ないうちに大きくなった。」
頭をなでようとしたが、ルードは軽やかによけ、

「何を言ってるんですか、父上。この前の西賊討伐の時に一緒に軍を率いてからまだ2週間ですよ。」

「そうだったな。いや、まあ立て。ミレットもだ。」

「で、父上…今回の呼び出しはやはり…」

王の表情が突然固くなる。

「ああ、そうだ。西賊討伐をたのむ。最近再び勢力を盛り返してきたようだ。」

「私も同行ですか？」

「いや、ミレットには国外に出てもらう。」

「トス、ですか？」

「ふむ…そうだ。トスに向かいこの密書をヌーブル王に渡すという重大な役割だ。やってくれるな？」

「はい。」

突然兵士が息を切らせて間に入ってきた。

「伝令！アグリード軍が領土内に侵入、ゴルダゴ要塞に攻撃を仕掛けました。」

二人は驚愕するが、王は平然としているように見える。

「予想より少し早かったが…二人とも、それぞれ任務をこなしてくれ。」

「はい。」

二人は出て行く。

王は誰にも聞こえない独り言をつぶやいた。

その表情は、決して偽ることの無い決心でいっぱいだった。

「どうしたの、姉さん。暗いよ。」

「うるさいわね、この国が今攻められてるのよ。命を懸けて戦ってる人がいる。そんな人たちのことを思ったら暗くもなるわよ。」
ルードはじつと姉を眺める。

「なによ、なにか文句でもある？」

「いえ、無いです。」

しばらく歩く。

軍の駐屯地までは同じ道のりで護衛もつけず二人は行く。

ふいにルードが口を開く。

「姉さんは…」

「え？」

「姉さんは、僕が守るから…」

「…！」

思いがけない言葉にミレットは驚く。

「今はまだ弱いけど、修行して、強くなって姉さんを守る。今回も本当はついて行きたいけど、国を守るためだから仕方ない。」

「ルード…」

「この戦争が終わったらまた会おう、姉さん。」

「うん、きつとね。」

言い終える瞬間、ルードは頭に激しい衝撃を覚える。

「…っ」

あまりの痛さに声も出ず、しゃがみ込むことしかできない。

「ルード!？」

ミレットの呼び声に言葉を返せない。

「っ…くっ…」

外部からの衝撃ではなく内部から破裂するかのような衝撃だ。次第に痛みは治まってくるが…

「ど、どうしたの!頭が痛いのか?医師を呼ぶわ。ちょっとそこでまっ…」

苦しみの滲み出た声で王子は遮る。

「だ、大丈夫…だよ。軽い頭痛…よく、あるんだ…」

姉に迷惑はかけられないと言う気持ちから出た言葉だったのか？

「そんなこと聞いたことなかったわ。ちゃんと診てもらったの？」

「いや…でも大丈夫、すぐ…おさまるから…」

「でもっ！」

そのとき、王女の背後から澄んだ

「ミレット様？」

そこには王国の騎士が立っていた。

馬を引き剣を携えている、白銀の鎧を着込んだ騎士だ。

「フィーガ！」

ミレットの声に騎士フィーガはルードが倒れているのに気づいた。

「お、王子！どうなさったんですか！は、はやく城内へ！」

「大丈夫、よくなってきたみたい。ただの頭痛だよ。」

「頭痛といいましても危険なものはあります。一度医者呼んだほうがいい…」

ルードは再び遮り、

「フィーガ、心配かけてすまない…でも、僕たちには時間が無い。すぐにでも出撃できるようにしてくれ。」

痛みは嘘のように無くなっていた。

フィーガは微笑んだ。

「…そう仰ると思っていました。すでに準備は万端です。今すぐ発ちますか？」

「うん、そうする。ミレット、絶対生きて帰るから。心配しないでね。」

「ルード…私も、きっと帰るわ。お互い、生き抜きましょう。」
そして二人は別れた。

いつ会えるか分からない。

もう会えないかも知れない。

密かに蠢く野望を知らず、

溢れつつある闇を知らず、

二人は旅立つのだった。

「フィーガ、僕たちは何のために戦うんだろう。本当に手に入れたものは何だろう。僕は姉さんを失いたくない。父上を失いたくない。国も失いたくない。フィーガも失いたくないものはたくさんあるよね。失わないと分からないものもあるかもしれない。僕は戦争を好きになれない。守らなくてはいけないけど、それで死んでしまった人やその家族は悲しむと思う。そして憎しみが生まれる。そんなことで国が良くなるとはどうしても思えないんだ。」

フィーガは、分かってしまった。

「王子……」

英雄を信じるかと聞かれたら俺は信じないと答えるだろう。

この大陸に住むほとんどの人が信じないと言う。

この平和な時代に英雄など必要ないからだ。

その平和が少しずつ崩れようとしているのに、人々は気づかない。

避けては通れない道なのに人々は避けようとする。

それはつまり破滅であり絶望である。

確実に迫る闇と欲望。

人々はもう感じない。

先に待つものも知らずに滅んでゆくのだ。

第2章 王都陥落

かつて世界を闇が覆いつくそうとした時代があった。

人はなすすべもなく破滅の一途を辿ろうとしていた。

しかし人は対なる力を手に入れ、それに対抗した。

それより幾千の時が流れ…

今となつては伝説に残るのみ…

「伝令です。」

「うん、教えてくれ。」

晴天。

もう、すべてが気持ちよく進みそうな青空が広がり、ほのかに吹く風が気持ちいい…はずだったが…

「現在王都は危機的状況にあります。王女ミレット様は無事に出港されましたが、我が軍は敗勢にあります。」

セルメン王国王子ルードは、表情の変わらないまま聞いていた。

「わかった、今すぐ戻ろう。父上、姉さん、無事でいてくれ…」
心の乱れが死につながる。

それが戦争である。

いくら劣勢でも、負け戦でも、心がまとまりあっていれば相手にとって脅威となる。

たとえどんなに心配でも、辛くても、心が乱れては軍の壊滅につながる。

必死にこらえる。

戦場でどれほど大きな悲しみが生まれようとも、
指揮官というのはそういうもの。

そう習ったのだ。

そして今までの実戦でわかったのだ。

早く父の元へ。

はやる気を抑え、1歩1歩王都へ戻る。
しかし…

「セルメン王、カウレット…だな」

まるで闇の底から発しているような声で緑髪の男は言う。

「貴様の首、俺がもらう。」

「そう簡単にとれると思ったたら間違いだ、アグリード將軍キラ。」

王城は完全に包囲されていた。

帝国八将のうち3人もがセルメンに出撃し、そのうちの一人キラの軍が包囲している。

絶体絶命…というより、壊滅状態である。

残ったのは王と近衛の兵が数人だけである。

「この殺気、この間合、剣王と呼ばれるいわれか。」

「ゆくぞ」

凄まじい勢いで王が飛び出す。

あまりに速く影すらも見えない。

「ぐっ」

金属音とともにキラが吹き飛び柱に激突する。

止まらない。

一瞬で間合をつめ、一気に切りかかるが、ぎりぎりというところでキラが飛びのく。

柱が真つ二つに切り裂かれている、異様な光景。

「さ、さすがだ、剣王。だが貴様は四度も我が槍に近づき…」

暗く笑い

「生気を吸われた」

「…」

「どうだ？命が短くなったのがわかるだろう」

カウレットが膝を地面につく。

「剣王も俺にかなわない。この槍にかなわない。…とどめだ。」
剣王カウレットの顔は最後まで勇ましかった。

ルード…

運命の子、ルード…

悲しいことなどない。

悩むことなどない。

進むのだ。

まっすぐ。

まっすぐ…

ほら、見えるだろう、あれが落神山だ。

——らくしんざん？

そうだ。昔伝説で英雄達が戦った場所だ。

——えいゆう？

ああ。お前もそうになりたいか？

——うん。

そうか…そうだな…お前はきっと最高の英雄になれるぞ。

ルード…

運命の子、ルード…

そんなところで悩んでいていいのか？

お前は進む。

前へ。

前へ…

今見えない道も

もうすぐ見える。

立ち止まるな…

ルードよ！

「父上！」

突然の声に目を開ける。

「父上！ああ、父上…」

「ルードか…」

我が子の声だ。

「父上…」

言葉が…

「ルード…運命の子、ルード」

勝手に…

「父上、しっかり！！」

「自分の道を歩くのだ…たとえば、そこに闇が待ち受けようとも…」

「ち…」

「行くのだ。先へ。まっすぐ。未来、へ…」

そう、たとえその先に闇しかなくとも。
立ち止まっではいけない。
とめてはいけない。
未来はお前が切り開くのだ。
ルード……

光は闇を払う。

世の道理だ。

すべてはそこから始まる。

すべてはそれが原点である。

英雄は光で、悪が闇。

ならば今この世界は英雄に満ち溢れているのか？

英雄に…

光。

この光に満ちた世界が…

闇に

勝てるとでもいうのか？

第2章 王都陥落（後書き）

投稿かなり遅れました。第2章 王都陥落。この物語の真髄である闇と光について触れてみました。まだまだ話の序盤ですがね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1825a/>

封魔伝説

2010年10月21日22時45分発行